

当館収蔵資料の新知見

佐藤 啓

1 はじめに

本稿では、当館に収蔵する資料のうち、新知見が得られた土偶 1 点と土器片 1 点について報告する。これらは、すでに発掘調査報告書に掲載されていた資料であるが、展示準備等の資料観察時に、報告書に記載がない所見が発見されたため、再報告するものである。なお、掲載にあたり、実測図は報告書に掲載された図に一部加筆し、写真は新たに撮影した。

2 接合した土偶破片—七郎内C遺跡—

七郎内C遺跡は、石川郡石川町下ノ内に所在し、阿武隈川とその支流の社川が合流する地点の、阿武隈川東岸の段丘上に立地している。国営総合農地開発事業に伴い、昭和 56（1981）

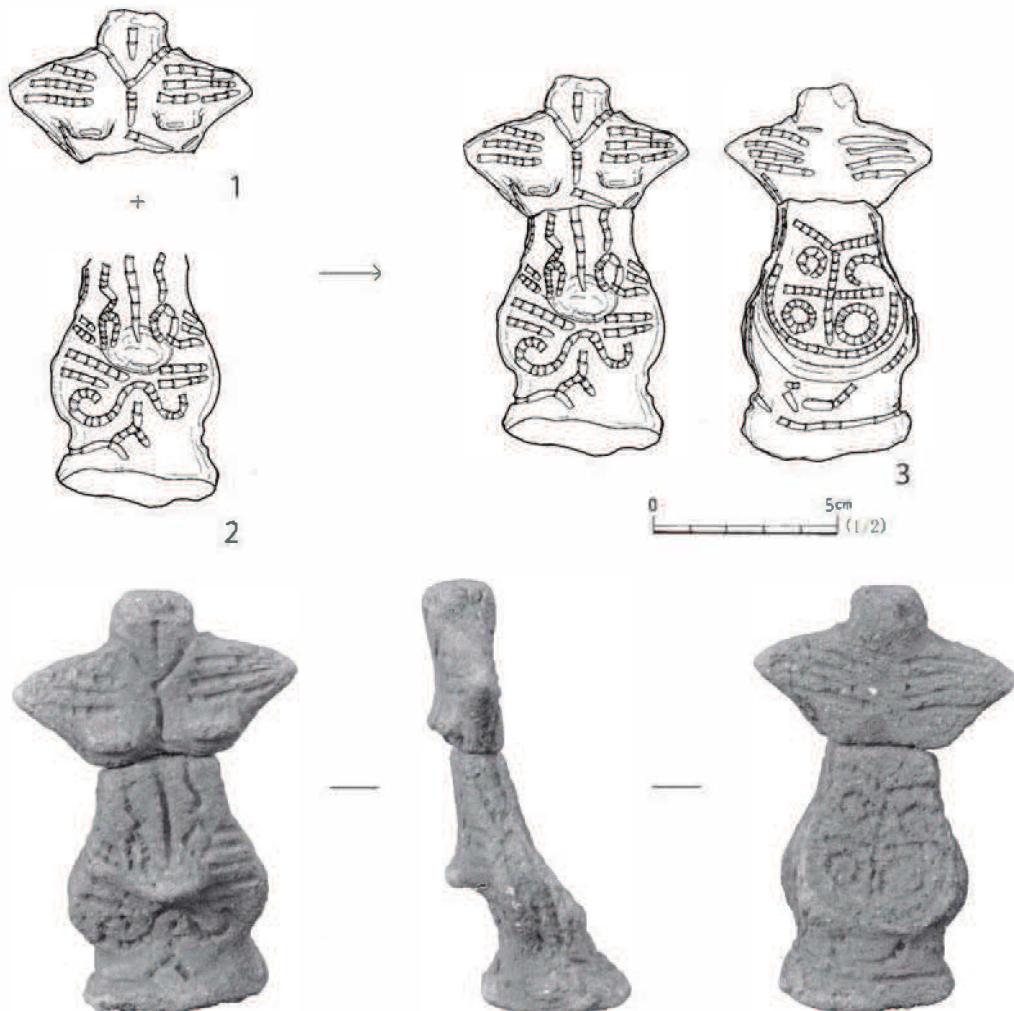


図 1 七郎内C遺跡土偶の接合例

年に発掘調査が実施され、『母畠地区遺跡発掘調査報告X』にその成果が刊行された（註1）。

発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明し、少量ながら弥生土器も出土した。遺跡の主体は縄文時代で、竪穴住居跡6軒・埋甕5基・土坑71基・遺物包含層4か所などが調査され、なかでも、縄文時代中期の大木8a式前半の土器群や、土坑から出土したコハク玉50点余などが注目された。

図1は、第1遺物包含層から出土した土偶片2点（1・2）と、これらが接合した状態の図（3）である。報文中では、1が第110図1包565、2が同図1包562として図示されている。1が体部上半、2が体部下半で、体部の乳房直下で接合した。表面の色調は赤味が強く、金雲母を多量に含む特徴ある素地土で成形されている。

資料は、突き出た臀部と肉厚な脚部の「出尻土偶」で、接合して高さ9.7cmまで復元される。報文中では正面が垂直になるような傾きで図化されていたため分かりづらいが、上半身はかなり前かがみな姿勢をとる。文様は、腕から肩にかけての体部上半と腹部および臀部周辺の2か所に集中しており、頸部で合流し垂下する正中線が表現されている。文様はすべて有節沈線で描かれ、大木7b式から大木8a式古段階の土器と同じ技法で施文されている。

3 縄文時代後期前葉の人面付土器－柴原A遺跡－

柴原A遺跡は、田村郡三春町柴原に所在し、阿武隈川支流の大滝根川によって形成された河岸段丘上に立地する。三春ダム建設に先立ち、昭和63（1988）年に発掘調査が実施され、その成果は『三春ダム関連遺跡発掘調査報告2』として刊行された。その後、平成2（1990）年に確認調査が行われている（註2）。

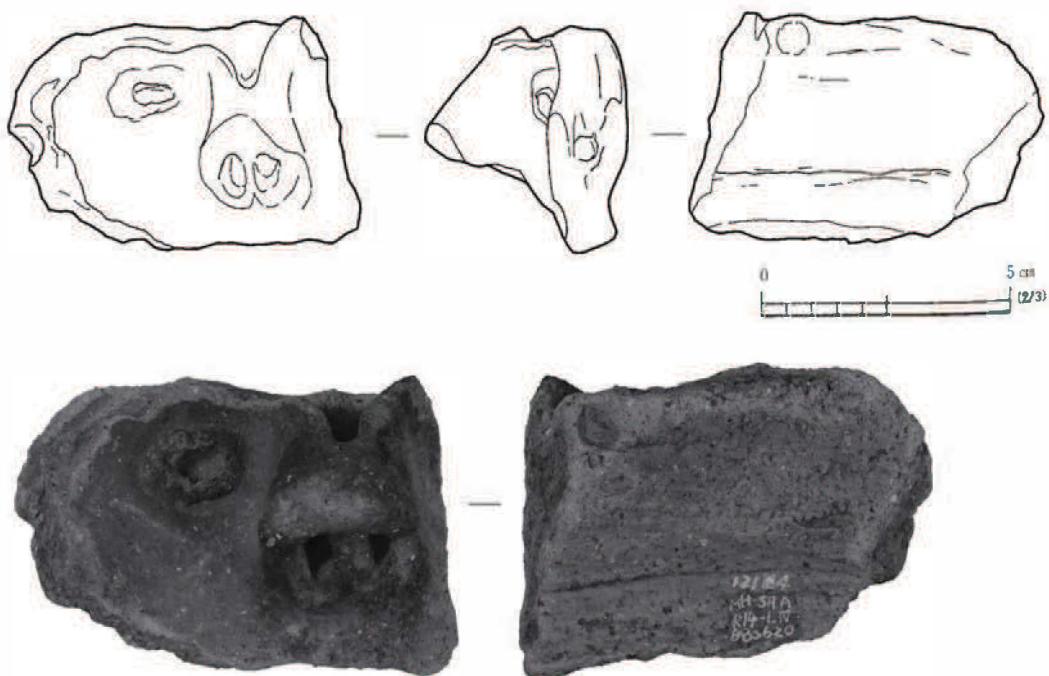


図2 柴原A遺跡の人面付土器

調査の結果、縄文時代中期末葉から後期前葉を主体とした集落遺跡であることが判明した。なかでも、当時は検出例が少なかった敷石住居跡が複数検出され、注目を浴びた。

図2は、報文中の図121-4に掲載された資料である。図・解説とも土偶の項目に掲載されており、解説は頭部表現について複数の土偶と併記していたのみであった。

このたび実資料を再検討したところ、大形深鉢の口縁部外面に付された人面装飾であることが判明した。それは、口縁部内面付近に施文される盲孔が確認されたためである。この人面装飾は、器面に粘土を貼り付けて成形されており、眉と鼻、目、耳とみられる部分が認められる。眉から鼻にかけての輪郭は「ハート形」を呈し、背面には、輪郭に沿って凹線が引かれている。凹線は正面左側面の貫通孔まで続くのが確認できる。以上の特徴から、この土器は、縄文時代後期前葉の綱取II式土器期頃に比定される。

吉本洋子・渡辺誠の研究によれば、人面装飾が付いた土器は、縄文時代前期初頭には出現し、中期前半にピークを迎えて、中期後半に急激に減少した後、数は少ないながらも弥生時代まで続くという（註3）。また、分布の中心は、関東甲信地方とされるが、東北地方も中期前半と中期末葉～後期初頭の2時期に集中することが知られている。このうち、福島県と近隣地域における人面装飾がある土器は、施文部位に注目すれば、大きく2類に分類される（図3）。

A類は、土器の器面に人体文ないし人面の装飾が付されるものである。現在のところ、県内では大木7b式～大木8a式期の石川町七郎内C遺跡（図3-1）を最古例とし、中期末葉の福島市和台遺跡の人体文土器（2、国重要文化財）、後期初頭の郡山市馬場中路遺跡（3）、後期前葉の柴原A遺跡（4）などがあり、後期前葉まで製作されたことが分かる（註4）。装飾される土器は深鉢が主体を占めるが、飯館村宮後B（上柄窪）遺跡では大木10式の壺が報告されている。また、馬場中路遺跡の口縁部貼付文から隆帯が垂下する後期初頭の深鉢を人体文とする意見もあり（註5）、郡山市曲木沢遺跡で大木10式に付された人体文土器2点が報告されている。これらはすべて、粘土を貼り付けて描かれている。

東北地方全体に目を広げれば、岩手県けや木の平団地遺跡や同県館IV遺跡など岩手県以北での出土が報告されている。時期的には中期末葉から後期初頭に比定される例が大多数で、同時

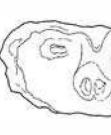
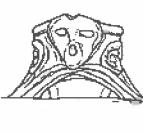
	中期初頭	中期前葉	中期中～後葉	中期末葉	後期初頭	後期前葉
A類		 1 七郎内C		 2 和台	 3 馬場中路	 4 柴原A
B類	 5 愛谷	 6 岡野田	 7 塙越	 8 川窪	 9 馬場中路	 10 梁瀬浦 (宮城:参考資料)

図3 県内出土の人面付土器（縮尺不同）

期に分布する狩猟文土器と関連付ける論考もみられる（註6）。東北地方北部では、隆帯施文から沈線施文への変遷が指摘され、県内の資料とは様相が異なるようである。

B類は、把手に顔面が表現されるもので、顔の向きが土器の外面を向くものと内面を向くものがある。B類は比較的多くの例が知られており、深鉢のほか浅鉢（5）、鉢（7）、壺（10）にも付されている。大木7b式に比定されるいわき市愛谷遺跡（5）を最古とし、後期初頭まで確認できる。後期前葉の例は見いだせないが、参考資料として図示した宮城県角田市梁瀬浦遺跡例（10）のように、当該期にも存続するのは間違いない。顔の表出は同時期の土偶の表出と共通しており、中期中葉には「S字」状の隆帯を立体的に組み合わせて、目や口を表現する例も多い。

4 ま と め

今回、2点の資料を紹介した。このうち、人面装飾が土器に付された柴原A遺跡の土器片は、縄文時代後期前葉の人面装飾土器として、中期初頭から続く土器装飾の伝統のなかに位置づけられた。今回の報告では、獣面装飾された土器群や土偶文様との関係性については言及しなかったが、これらの点については今後の課題としたい。

なお、資料集成にあたり押山雄三氏と当館職員に協力いただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

< 註 >

(註1) 福島県教育委員会 1982 「七郎内C遺跡」『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告X』

(註2) 福島県教育委員会 1989 「柴原A遺跡（第1次）」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告2』

福島県教育委員会 1993 「柴原A遺跡（2次調査）」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告7』

(註3) 吉本洋子・渡辺誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学1』

1999 「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補）」『日本考古学8』

2005 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究（追補2）」『日本考古学19』

(註4) 中期中葉から後葉に属する例として、須賀川市塚越遺跡出土の鉢（図3-7）があげられ、把手外面の曲線的な文様が両腕を広げた人体文にも見える。また、把手に人体文類似の装飾が施された栃木県坊山遺跡の深鉢もある。この時期の資料は、後述するB類との関連がうかがえる。

(註5) 註3に同じ

(註6) 斎野裕彦 2008 「狩猟文」『総覧 縄文土器』など

< 文 献 >

東北歴史資料館 1996 『東北地方の土偶』

いわき市教育委員会 1985 「愛谷遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告 第12冊』